

私は秘密を知っています

Wedge White

私は秘密を知っています

私と先生が「そういう」関係になつてから、結構な時間が流れています。

私たち天使は原則として、楽園、あるいは天界で一生を過ごします。そのため、夜が訪れない真昼の世界で生きることに慣れている訳ですが、地上では夜とされる時間帯でも常に窓の外が明るいということには、いくらかの不思議を感じことがあります。

「こんばんは、先生」

普通、私たちはそんな挨拶をしません。時間帯ごとの挨拶という概念はなく「こんにちは」という挨拶を常に使います。そんな中であえて、こんばんはと言つたのには理由があつて。「……やめてくれよ、その挨拶」

「うふふつ、いいじやないですか。先生と私の秘密の挨拶なんですから」

先生は露骨に嫌そうな顔と声音で言います。しかし、それがウソであることを私は知つていきました。

こんばんはというのは、私と先生が恋人として会う時にだけ使う、秘密の合言葉。

地上ならば夜とされる時間帯、先生が宿直室で暇そうにしている時に、私はその言葉と共に

部屋に入ります。

「なあ、ルカ。その……なんだ」

「はい？」

「最近は当番の調整の関係で、中々俺に宿直が回つてこなくつて……その、なんだ。久しぶりだよな」

「ええ、そうですね。私も待ちくたびれちゃいました。……でも、ようやく、ですね」

先生は少し切なそうな。……そうですね、少年のような顔をしているように見えました。

「だからその、結構俺も我慢できないつて言うか……いきなりだけどさ、中、挿れていいか？」

「あはっ……！先生、顔を真つ赤にして、なんておねだりしちゃつてるんですか？教え子に何をしたいって言つちゃいました？中、とか、挿れる、とか。主語を省いて言われちゃつたら、よくわかりませんよ？」

「う、ううつ……ルカ。お前の女性器に、その……俺の男性器を挿れていいか、つて言つてるんだ」

「うふつ、よくできました。先生が自分から求めてくれるなんて機会、滅多にありませんからね。いーっぱい、楽しんじやつてください。ほら……」

私は手早くスカートを脱ぎ、下着を下ろしました。……既に秘所は湿つてしまつています。これから先生と会つてエツチなことができるというのに、期待しない訳……ないじやないです

か。

「つ…………！」

先生が息を呑みます。……可愛い。

私はもつと先生の気分を盛り上げてあげるために、完全に服を脱ぎました。ブラに包まれた胸が露わになつて。ブラも取り去れば、ぷるんつ、という可愛い擬音では收まらない。大質量のおっぱいが、どさつと現れます。——先生が目を見開き、おっぱいの揺れに目を奪われているのがわかりました。股間もピクツ、と反応します。

「せつかく先生から求めてきてくださつたんですから、自由に挿れて、楽しんでください。中に挿れてガン突きして、おっぱいが震えるのも楽しんでくださいね」

「こ、このつ…………！教師を舐めやがつて…………」「舐めてませんよ？愛しているんです。先生が好き過ぎて。だから可愛い先生を見れるのが大好きで…………ふああつ！」

「うつ、くうつ…………！」

先生はすぐにズボンからモノを取り出し、それを濡れそぼつた私の中へ。

入った瞬間、甘い痺れにも似た感覚が私を悦ばせます。それに応じるように、きゅつ、と膣内を軽く締めてお迎えすると、先生のモノも嬉しそうにピクリ。いつまで経つても先生の反応は童貞だった頃と大して変わりません。……本当に愛おしいウブさです。

「う、動くぞっ……！」

「はいっ……！」

「んんっ！ふつ、ふうっ……！」

「あはっ……！先生、顔必死っ……氣を抜くと、すぐに出しちゃいそうなんですよね？」

先生はぎゅつ、と私の腰を掴むと、大きく腰を前後に動かし始めます。

大きく勃起したモノが膣壁と擦れ合い、快楽を生みます。既に愛液に満たされた中は、もつとぐちゅぐちゅのじゅぼじゅぼになつて……先生のモノに愛液でマーキングしようとしているかのよう、ぐつしょり。

先生はその感覚が大好きなようで、目を細めて感じてしまいます。……私はまだ本格的には性感を覚えてないのに、ずるい先生。

残念ながら、の話ですが、私は先生のはつきり言つてたどたどしく、ぬるい抽送では……そんなに膣内で気持ちよくなれないみたいで。モノはおつきくて、私の中を蹂躪してくれることみたいなのに……ちょっとそこは残念。

だけど、先生が中に入ってくれる。私と粘膜で触れ合つてくれている。……そう思うだけで、私の中よりも心がきゅんきゅんしてしまいます。

「うつ、くうつ、ううつ……！」

「先生つ、もつと私のこと、見てくださいよ？あはっ……先生が一生懸命腰を振るから、ほら

つ……」

「うつ!? あつ、ああつ、はあつ……!!」

先生を受け入れている間、私は必然的に宿直室のベッドに横になる形になっています。いわゆる正常位の体位ですからね。

でも、そこからちよつとがんばつて上体を持ち上げて、おっぱいを強調してあげました。先生が腰を振る度に、ぶるんつ、ぶるんつ、と震えるおつきなおっぱい。どんどん熱くなつていく体温のために、表面には汗が浮かび、胸が持ち上がる度にそれが飛び散ります。

「うふつ、どつさりおっぱいが揺れるの見るの、先生大好きですか? 一生懸命セックスしてると、おっぱい揉めないのが残念ですねー」

「うつ、ううつ……! はつ、はあつ、はあつ……!!」

「あはんつ! 悔しさで私のこと、イかせようとしてるんですか? まだまだ、それぐらいじや私のこと、イかせられませんよー?」

私が煽つてあげると、先生はムキになつて腰を振り出します。

……うん、これぐらい激しくて、ようやく気持ちいい感じ。基本、先生含めて神様や天使は性欲があんまりないので、こういう時のハングリーサイズ引き出してあげないとないんでしようね。

「はつ、はあつ、はつ……! ルカ、ルカつ……!!」

「先生っ……！好きです、大好きですっ！だから、もっと奥っ、ずぼずぼってっ……！」

「あっ、ああっ！！」

「ふつ……んつ、んあつ、ああああんんつ！すつごい、深いいいつ！わ、私の中つ、裂けそ
うなぐらいでつ……！これ、いいのおつ！！」

私は先生におねだりして、もつと深くまで挿れてもらいます。そうするとようやく、はつき
りと快楽を覚えられます。

元から頭は興奮していたけど、体も発情してきている……と言うんでしようか。
じゅっぽ！じゅっぽ！じゅっぽ！するるううつ！

卑猥な水音が、脳内にまで響いているみたい……この演奏をしているのは、他ならない私の
蜜壺と先生の肉棒。

太くてガチガチの先生のが、私を気持ちよくしてくれている。私にマゾの気はないつもりで
すが、先生に責めてもらえるのは、すごく心地よくって……！

「先生っ！先生先生先生っ……！私のこと、イかせてくださいつ……！先生も、私の中でいつ
ぱい出してつ！！教え子の中に、先生精液、いっぱい出して孕ませてくださいつ！！」

「ふつ、んあああつ！く、そおつ、出るつ……！はあつ、出るぞつ……！」

「はい、出してつ！中にいっぱい、ぶつかけてつ……！」

「くつ、うううつ！」

「ふあっ、あああああんっ！」

先生のモノが一際大きく張つたかと思うと、ドクンツ、と大きく脈打ちます。そして、先端から溢れ出す白濁液——温かい、少し粘つく液体が私の奥へ奥へと吐き出されていきます。

私の体は、下半身だけと言わず、全身が激しく痙攣して……先生に精を放つてもらえる喜びに絶頂を迎えていました。

「はっ、はあっ、はあっ……」

「先生……いっぱい、出ましたね。私の小さなナカがいっぱいになつて……溢れちゃいそうです」

「あ、ああ……溜まつてた、のかな……」

射精をした後の先生は、いつもけだるげで。でも、満足そう。

「ふあっ!? あっ、やあっ、もう抜いちやうんですか？」

「だ、だつて、このままじゃ……」

「もつと搾り取られちゃいそう、ですか？」

「つ…………！」

早くも私の中から腰を引き、モノを抜いてしまいそうな先生にそう言うと、無言で赤面してしました。

そして、そのまま私の膣内から肉棒を抜いてしまいます。

「先生、わかつてますよね？今までにはいつも、先生のを私がパイズリで搾り取つてから、本番をしてもらつていました。ということは、今度は逆にパイズリでファニッシュ、ですよ」「なつ……!? も、もう十分出したんだ、これ以上なんて……」「ええく？ ジャあ先生、今回はパイズリなしでいいんですか？ ルカちゃんの爆乳に挟まれずに、もうさようならでいいんですか？」

ピクンツ、と震える先生の肉棒。……わかりやすいんだから。

「そ、それは……」

「ダメですよね。じゃつ、シましよう？ いつでも私のココ、準備OKですよ」

「ルカつ……！」

私はベッドから下りて、先生の足元に膝立ちになります。……中出し精液が膣口から流れ落ちて、ベッドシーツや床を汚していきます。

でも、そんなのどうでもいいんです。だつて、私は先生とシたいんだから。

「はーいっ、それじゃ、両側からルカつぱいに挟まれちゃいましようね！。どつさりおつきいのに、ぶりつぶりのパイズリ専用おっぱいですよ。あはつ」

「うくうつ!?」

私はあえて勢いよく、まるで先生のを殴りつけるようにおっぱいでプレスしてしまいます。

その勢いでぴゅつ、とさつきの射精後、まだ残っていた残尿のような精液が飛び出ます。

「あはつ、どうせおっぱいで搾り取るんですから、完全にリセットしちゃわないと、ですよね？ 膀内でいっぱい出してもらえるのも嬉しいですが、私、先生をおっぱいでイかせてあげるのが大好きなんです。だから、パイズリは誇りを持つて、ていねいにやつていきますよ？ ねーっ、先生♪」

「うつ、うああつ！？」、これ、ぐうううつ……！」

押し付けたおっぱいを抱きかかえるように持つて、思いつきり先生のを擦り上げます。勃起したペニスが、それよりも大きなおっぱいに押し上げられ、波の中をたゆたう小魚のように押し流されてしまいます。でも、がつちりとおっぱいでホールドしたまま、今度は下へ……。

「うつ、ぐうううつ！ やばつ、出るつ……！」

「いいですよ？ 何発でも出しちゃつてください。私を孕ませるための子種汁、いくらでもおっぱいに無駄打ちしちゃつてくださいよ。あはつ、もしかしたらおっぱいを孕ませちゃつて、ぷっくり乳首から母乳が出るようになっちゃうかもですよ？」

「つ……！」

「あはあつ、出ちやつたあつ。先生、私がミルク射精する想像でトドメ刺されてイッちやつたんですね？ このこのー、変態教師めーっ♪」

ビクンッ、と肉棒が震えて射精をしていきます。二回目の射精は、ちょっと量は少なかつた

ですが、あつたかくてドロドロ。まだ体としては限界に来てなかつたはずなのに、エツチな妄想でイツちやつたからこそこの量なのでしょう。……可愛い先生。

「これぐらいじやまだイキ足りませんよね？おもらしせーえきをローションにしてーつ、もーつと、ズリズリーー！」

「ううつ!?あつ、くああつ、ああつ!？」

私は精液をおっぱいの谷間にまぶすように、両方の乳房を互い違いに上下に動かし始めます。ずりゆりつ、ずりゆりつ、ずちゅずちゅううつ！

私のおっぱいが卑猥なメロディを奏で、イツたばかりの先生の肉棒はすぐに復活してしまいます。

「このままズリズリ射精、決めちやいますか？ねつ、もうイキそうなんですよね」

「うつ、くうつ……！ひ、卑怯だぞつ……！」

「ええ？爆乳おっぱいはルカちゃんが持つて生まれた武器じやないですか。武器は有効活用しないと、ですよ。先生だつて、こーんな凶悪なモノを隠し持つてるんですから、おあいこです。ただ、先生が私のおっぱいにめちゃくちゃ弱くつて、精液びゅーびゅー出しちやう、つてだけでつ」

「あつ、ああつ……!!」

「ふああつ!!やつたあつ、ドロドロ精液ローション、追加でーすつ。うふつ、また量は少なめ

ですね。……じゃつ、そろそろ本番パイズリ搾精、イツちゃいますか?」

三回目の射精も量は控えめ。私はそれが垂れ落ちないように、ちゃんとおっぱいですくい上げて、谷間に精液のプールを作っちゃいました。

「こ、これ、本番じやなかつ……くあああつ!?」

「本番と言うからには、本番さながらのパイズリじやないと、ですよね?今までただ上下に擦るだけ……本番は前後におっぱい、打ち付けちゃいますよつ」

「くつ、ううううつ……!こ、こんなの、反則だつ!だ、ダメだつ、気持ちよすぎてつ……!」

私はぎゅうつ、とおっぱいを中心を集め、先生のモノをギチギチに締め付けてします。そうして、そのまま前後に体を動かし始めました。

ばちゅつ!ばちゅるうつ!ばちゅばちゅううつ!!

今までよりもずっと卑猥な。本当に本番をしているかのような、私のおっぱいと先生のモノが擦れ合う音がします。

「先生!まさか、パートナーを責めることができるのは、男性だけだと思つてませんよね?先生が腰を打ち付けるみたいに……んふつ!私はおっぱいを打ち付けて先生のこと、犯しちゃえるんですからね?」

「くうつ、ううううつ!!で、出るつ……!もつとルカのおっぱい、堪能したいのにつ……!犯されパイズリ、うくうつ……!経験したいのに、出ちまうつ……!!」

「うふふつ、泣いても笑つても今回はこれで終わりでーす。不本意パイズリ射精キメて、また次の宿直の日まで生殺し状態でいてください！」

「あつ、あああああああつ！」

先生の全身がビクビクビクツ、と震えます。ぷつくりした亀頭から、ドビュルウウウツ！と溢れ出す白濁液。

「あはつ……！先生、本気敗北射精ですよねえ、これ？せめて私が漏れちゃうぐらいの大量射精して、反撃しようつて感じですか？でも残念ながら、そんなことができませんよーっ♪」

「うつ、ううううつ！！全部、出るつ……！うつ、くうううつ！！」

「ふああああつ！！あつ、すつごいっ……！ドロドロ精液、私の爆乳どつさりおっぱいを覆い尽くしちゃうぐらいですよ？ほらほら、もつとがんばれーっ！精液全部枯れちゃうぐらい射精して、勝者の爆乳おっぱいに祝福しちゃつてくださいよーっ♪」

「あつ、あああつ！」

おっぱいの中で、長い長い射精をしていた先生ですが、やがてそれも終わって、挟まれながらへなへなと、落ち込んだように垂れてしまいます。

「はい、おしまーいつ。ほらほら、先生。ちゃんと見てくださいよ？」

「えつ……？」

私は先生のモノをずっと挟み込んでいたおっぱいを、左右に開きました。すると、谷間から

だらあーーつ、と。先生が吐き出した精液が全て流れ落ちていきます。

「うふふつ、これが先生の無駄打ちした全部の精液です。これだけの量、生中出ししちやつてたら私のこと孕ませちゃつてたかもなのに、ぜーんぶおっぱいに出したんですよ？悔しいですねー」

「あつ、くうつ……はあつ……」

先生は脱力してしまったようで、ふらふらとベッドに腰かけます。私はちゃんと、最後の一滴まで床に精液が垂れ落ちていった後。流れてはいかない精液を指で絡め取り、舐め始めました。

「ちゅぶつ……れろつ……ちゅつ、ちゅるるうつ……んぶつ、先生の無駄打ち精液、美味しいですよ」

先生はちよつとしょんぼりした様子で。でも、口元は緩んでいました。なるほどなるほど……つまり、そういうことですね？

先生の弱み。先生の本音を知つてしまつた私は、ルンルン気分で、まだイキ足りないながらも、宿直室を後にしました。

このまま、先生の精液の臭いと感触を残したまま寮室へ戻つて、いーっぱい、オナニーしちやいましょう♪

私は秘密を知っています

2019年 6月 5日 初版

奥 付

著者 Wedge White

URL <https://wedgewhite-team.wixsite.com/home>

E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<http://tokimi.sylphid.jp/>)